

「善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きつと死ぬであろう」(『旧約聖書』創世記第二章)

アダムとイヴは、この神の言葉に背いて禁断の木の実を食べて、「エデンの園」から追い出された。しかし神様は何故人間が善悪を知る(つまり知恵を得る)かと、死ぬと言われたのだろうか。なぜ賢くなつてはいけないのか。これは子供の頃からの疑問だった。

人類はその後、知恵を働かせて進化した。農業革命、産業革命、情報革命などを経て、今や地球の覇者となっている。とう

新美術
時評

近藤誠一

始め、核やサイバー攻撃による仲間割れが、人類を存亡の危機に落とし入れている。

「賢く」なったはずの人類が、なぜ自滅の道を選ぶのか。

それは人類の欲望と思いがりゆきであろう。「もっと」という願望は、知恵が生んだテク

得ると、それを欲望の果てしない追求に使う身を止ほすことを予見しておられたのかも知れない。ではどうすれば「欲望」をコントロールできるのか。

そこで役に立つかも知れないのが、「共感力」である。これは元々弱だった人類が、種の生存能力を高めるために、利己主義や相互不信を乗り越えて群れのサイズを大きくする上で力ギとなった能力で、そのためにミラー・ニューロンという新しい脳細胞を進化させた。この脳細胞を今再び活性化させ、人類の相互信頼と協調精神を高めていくことこそ、存亡の危機を乗り越えていくために必要なこと

ひとは「楽園」に戻れるか？

てい絶滅などしそうなもの。だがここへきて気になることが出て来た。気候変動やパンデミック、そして再び頭をもたげつつある核戦争の危機だ。

文明による自然破壊は生態系を狂わせ始めている。加えて気候変動やパンデミックなど、文明がまともに太刀打ちできない「反撃」が相次いでいるのに、人類は未だに本気で反省していない。このまま自然に負荷を与え続けると、生態系全体が大きく狂い、到底人間が生きてゆけない世界になるかも知れない。

また文明世界の内部においても、権威主義的独裁制の台頭を前に、戦後の秩序は綻びが見え

ノロジーのお陰で次々と達成された。問題があってもいずれ科学技術で解決できるという思い

上がり広がった。欲望を正面からは認めたアダム・スミスの「予定調和」論が、欲望の飽くなき追求を正当化する理論的根拠として使われ、そこに新しいテクノロジーが投入される。

かくして欲望に一定の抑制をかけることで、生態系の摂理に従って生きていた人類は、知恵によって得たテクノロジーで欲望を暴走させてしまった。それが歯止めのない経済成長や権力行使への誘惑を生み、自然破壊や核戦争へと人類を追い詰めている。「神」は、人間が知恵を

ではないだろうか。何をすべきかは分かっているのだから。

最近の研究によれば、この共感力を増すのは、数学・計算のような認知的能力ではなく、文化・芸術などの非認知的能力である。他との協力により壁を乗り越えることで自己肯定感が高まり、社会の連帯を強める。学校や家庭、社会のすべてにおいて、誰もが文化・芸術に親しみ、そのひとつを自ら嗜むことで、自然への畏敬の念と社会の連帯を取戻すことが期待できる。

知恵を欲望から切り離してこのように使えば、われわれは「楽園」に戻れるかも知れない。

(近藤文化・外交研究所代表)